【表紙】
西郷隆盛　全三巻

【表紙裏】

【1頁】
（一六ミリ）
西郷隆盛
全三巻　三六二米

台湾総督府
C第三九四号
検閲済
有効期間
自昭和十六年三月十三日
至昭和十九年三月十二日

活動写真「フィルム」検閲
規則第十条第二項ニ依リ
手数料ヲ免除ス

障害ナシ

【2頁】

【3頁上段】
1
【3頁下段】
梗概
　征韓の雄図空しく破れ、参議陸軍大将軍近衛都督西郷隆盛以下、副島江藤、板垣、後藤の薗参議怒髪桂冠して野に下る、時明治六年十月二十四日、その翌年六月西郷は賞典録を投げ出して私学校の建設を計り国家の為に鹿児島に於いて青年を教育せり、此報早くも東京に飛び政府は西郷反逆の野望ありと解釈して、大久保通時の警視総監、山路大警視に命を発し、二十三人の壮士を鹿児島に送り西郷暗殺を企てり、暗殺団巡邏ー火□搬出ー造船所移転に端を発し曽早田火薬庫

襲撃に狼火を挙げ激昂せる薩摩隼人の意気や天に冲ス．事局の混乱は遂に収拾の迷なきに至り、教へ子のために“何事も天命”と一言残して西郷上京を思い立つ．西郷の傘下に馳せ参じたる者無慮一万を越へ折から降りしきる雪を落花□蹴散らして鹿児島城下を後に進軍せり．時明治十年二月十五日．□戦争八か月！　その間九州の山野

【4頁上段】

2

【4頁下段】

を馳せめぐり二万の牡士佐犬□死なすに西郷只の一石も戦略をなさず．桐野、篠原等に総べて□せ悠々自適せり．斯くて可愛ヶ獄の険を破りて敗軍の諸兵を集め鹿児島に帰へれり．かくして秋風寂し明治十年九月弐三日思ひで多き故山の地．城山北東の谷間にて従□として死に就けり“何事も天命”この一言が尊き数多の犠牲と悲劇を織り行きし西南戦争の原因となつたのではなからうか．然して此の八ヶ月間九州全土に流した薩南健児二万の鮮血　これは我日本を甦生への道に、世界的への道に第一歩を進ませしめる為の有意義な貴重な深刻な鮮血であったのではなからうか

ー終ー

【5頁上段】

3

【5頁下段】

字幕

1．西郷隆盛

2．配役

伊丹　萬助　荒木　　忍　西郷　隆盛　東條　　猛
大山　綱長　谷崎　十郎　韋駄天三沢　新見　映郎
川村　純義　南　　光明　河原林少尉　嵐　徳太郎
谷村　計介　市川米十郎　篠原　国幹　岡村　義夫
相良　長民　河津満三郎　谷口　元助　中村東之助
辺見十郎太　東郷　久義　伊丹彦四郎　金子　　新
桐野　利秋　マキノ□六　村田　新八　小岩井昇三郎

【6頁上段】

4．

【6頁下段】

3．明治維新の大業成り国内も□第に整ひ、外国と和親する方針も定まつて使を朝鮮に遣はしたが挑戦は我好感を退けるばかりか、かへつてしばく礼を失いたなれば

4．朝議も殆ど征韓と決したが、たまく明治六年岩倉具視等欧米諸国を視察して帰り　此外征に反対して譲らなかつた

5．征韓論

6．“おいどんが朝鮮に赴いて談判を試みてなほ聞かぬ暁は出兵と一旦決定した筈ぢや．もう此上の議論は無駄では御座らんか“

7．“昨日の大政大臣がどうあらうと岩倉具視今日代理を務める以上押し切つても外征は反対ぢや“

【7頁上段】

5．

【7頁下段】

8．“内治を整へるのが第一ぢや　征韓などとは大勢を知り申さぬ言葉じや“

9．“そのやうな御意見ならもはや議論に及ばぬ”

10．“そい迄は御決心とある上はおいどんはもう何も申さぬ　貴方の御随意にしなされ“

11・征韓の雄図空しく破れ参議陸軍大将近衛都督郷西郷隆盛以下、副島、江藤、板垣、後藤の諸参議　怒髪桂冠して野に下る　時明治六年十月二四日

12．画中文字　表札　平瀬重助

【8頁上段】

6

【8頁下段】

13．山から明けて山へ暮るる小□ロの一壁村に世相の騒擾よそにし前参議陸軍大将近衛都督郷西郷隆盛　風月を共にし身を秘してゐたー

14．明治七年六月西郷は　少将桐野利秋、篠原国幹等と私学校を起した

15．私学校綱領

一．道を同し義相協ふを以て暗に衆せり　故に此理を研究し道義に於いては身不顧心踏行ふべき事

一．王を尊び民を憐むは学同の義旨　然らば此天理を極め人民の義務にのぞみては一向難に当たり一同の義を可立事

１６．私学校は西郷の名望と共に盛んとなつたが　それ等少壮の
【９頁上段】
7
【９頁下段】
徒は政府のなす所に不平を抱くものが多かつた
１７．“政府は暗殺隊を送つて先生初め吾々の私学校までつぶさうとしてゐます“
１８．“それ許りか東京では新巡査を募集して城下で征討の準備をほどこしてゐます・・・・・　“
１９．“政府はまだその上鹿児島から火薬を奪ひ取つて吾々を丸腰にしやうとしてゐわす“
２０．“先生！　造船所を移転させるには移転させる法がゐわせう　火薬を運ぶには規則がゐわせう・・・　“
【１０頁上段】
8
【１０頁下段】
２１．“先生　このまゝにして置いては吾々薩州の面目が立ちません”
２２．“政府が鹿児島に対する此の頃の□度は言語道断の極みでゐわす”
２３．“桐野さん！”
２４．“村田さん！”
２５．“晋どん！”
２６．“辺見さん！”
２７．貴方達は火薬や兵器を押へて置いて何に使這うと思ふておいでなさるのぢゃ“
【１１頁上段】
9
【１１頁下段】
２８．“火薬や兵器は大日本帝国を守る大切な武器でゐわすぞ”
２９．“まァ興奮せぬことぢや”
３０．火薬庫移転に端を発して形勢はますく切迫した
３１．“大山さん　これは皆□野海軍少佐からの届出でゐわすか？”
３２．“何事も天命ぢや　大山さん　儂はこれから東京へいきます”
第一巻終ー
第二巻終ー
【１２頁上段】

１０．
【１２頁下段】
１．かくて西郷隆盛状況の報一□巻而に伝はるや薩、隅、日三州の
士族猛然と□起し西郷の全土に□せ参ずる者□値一万を越え
積る砂塵を落下と蹴散らし鹿児島城下後に進軍せり
２．　画中文字　　新政厚徳
３．一方熊本城ではー
４．“私は西郷先生に大恩がある併し私は順逆の道理を充分□ました”
５．“僅かな兵を以てこの大軍を退けるは困難であらうが国内の大勢に
か丶はる事ぢや　谷千□　死を堵しても鎮台としての職責を全
ふする所存ぢや”
【１３頁上段】
１１．
【１３頁下段】
６．かくて明治十年三月十九日ー
熊本城内より轟く三発の砲声巷を厭し薩軍への宣戦は布告され
尊き偉人の犠牲と幾多の悲劇を生みし西南戦争の火蓋は切つて
落されたー
７．二月二十二日　薩軍は川尻に本営を置き熊本城襲撃を開始した
８．官軍は死力を尽して戦ひ防いだが遂に城内に退き固く守って屈
しなかつた
９．“火事だー”
１０．“熊本城が焼けた”
【１４頁上段】
１２．
【１４頁下段】
１１．“戦争だ”
１２．時に朝廷は有栖川宮織仁親王を征討総督として追い討の令を下さ
れ　官軍は二十六日福岡城に入った
１３．画中文字　　二本木大本営
１４．“薩摩隼人の前には熊本城等一もみと思つたが案外手数をかけを
る”
１５．“官軍の援兵は高瀬に迫つたといふことだから　こ丶は包囲のま
丶本隊を進めやう”
１６．“田原坂で一泡吹かして　進軍ぢや　進軍ぢや”

【１５頁上段】
１３．
【１５頁下段】
１７．“貝□私が□近をば□して居りますと熊本の方から怪しい奴が・・・”
１８．“貴様は熊本城を脱出して来た間者ぢやろう”
１９．“えらい損ぢや　五十三両かえしてくれ”
２０．人の心の倹と鳴る
　　石切場をも軽々と
　　のぼればやがて鹿児島の
　　札の辻より一里塚
　　二里塚越えて三里塚
２１．“此奴は薄馬鹿ぢや、ごわせんか？”
【１６頁上段】
１４．
【１６頁下段】
２２．“馬鹿ぢやなかぞ　助ぢや・・・”
２３．“熊本城脱出者でごわす”
２４．“外に一人谷村計介といふ伍長を取逃しました”
２５．“扨は・・・今の奴が谷村計介であつたかッ！”
２６．官軍は一日も早く城を□はんとしたが　薩軍は田原城の要害に
　　□つて激戦十数日に及んだ
２７．画中文字　病　院
２８．“皆さんのお骨折を厚く感謝しますぞ”
【１７頁上段】
１５．
【１７頁下段】

第二巻終ー

第三巻　ー

１．官軍は抜刀隊を組んで要害を破り　又一隊は海路入代に上陸し
　て薩摩の背後を突き　城内と始めて連絡することが出来た
　籠城実に五十余日であつた
２．これより陸軍の勢も次第に衰へて肥後、日向に□れたが　遂に
　可愛ヶ丘の険を越えて鹿児島に退く　九月一日のことであつた

３．“よう囲んだ　流石は儂の育てた帝国の陸軍ぢや”
４．“やがて一度はせねばならな日清日露の戦も　この意気があれば
【１８頁上段】
１６．
【１８頁下段】
　大丈夫ぢや“
５．“儂はこれで安心した　いつ死んでも心残りはなかぞ・・・・”
６．鹿児島に退いた薩軍は城山に拠ったがー
７．“薩軍は私学校を本営として城山一体を占領しました”
８．嗚呼　恨は永し　明治十年九月二十四日ー
９．　画中文字　新　政　厚　徳
１０．“世を騙し　恐れ多くも大君の赤子数多を失はしめ　御□□を□
【１９頁上段】
１７．
【１９頁下段】
１１．“不忠の臣　西郷吉之助　謹みてお詫び中止奉る・・・・”
１２．“晋どんたのむ・・・・”
１３．嗚呼硝煙の音絶えて　城山松の夕あらし
　岩間にむせぶ谷水　　非情の音を奏でる時ー
１４．“西郷大将の霊に敬礼ー”
１５．明治天皇の御慈悲により明治二十二年憲法法発布の日に　賊名を
　除かれて　正三位を贈られ　後　その子孫には伯爵を賜つた
１６．墓の文字
　　西郷　隆盛　墓
【２０頁上段】
１８．
【２０頁下段】
１７．桐□　利休　墓
１８．別府　□長　墓
１９．大山　綱長　墓
２０．贈　従五位　国士　谷村計介

ー終ー

【データ採録者…阿部玲子】【校正…森田健嗣】